報道発表資料

東京消防庁　Tokyo Fire Department

令和元年１２月２４日

住宅火災による死者が大幅に増加しています!!

令和元年中の住宅火災による死者は７９人（１２月２４日７時現在、速報値）発生し、昨年の同時期（※）と比較すると１７人増と大幅に増加しています。

特に、１２月に入ってからの死者は１２人発生しており、また、年明け後の１月から３月にかけては例年多くの死者が発生していることから、東京消防庁では「住宅火災による死者防止緊急対策推進本部」を設置するとともに、高齢者宅を訪問する住まいの防火防災診断の実施をはじめ、さまざまな対策を推進し、都民の皆様に注意喚起を行っていきます。

※同時期とは１月１日から１２月２４日、死者は自損を除く

■　死者の発生した住宅火災の出火原因では、「たばこ」が最も多くなっています。たばこを原因とする火災の中でも「寝たばこ」は、たとえ住宅用火災警報器が作動しても気付くのが遅れるなど、非常に危険な行為です。絶対にしないでください。

■　住宅用火災警報器は、火災の早期発見により、早期避難、早期通報等につながることから、火災による被害の低減に非常に効果がありますが、その効果を発揮するためには、火災予防条例どおりの確実な設置と、定期的な点検、設置から１０年経過した場合の機器の交換が大切です。

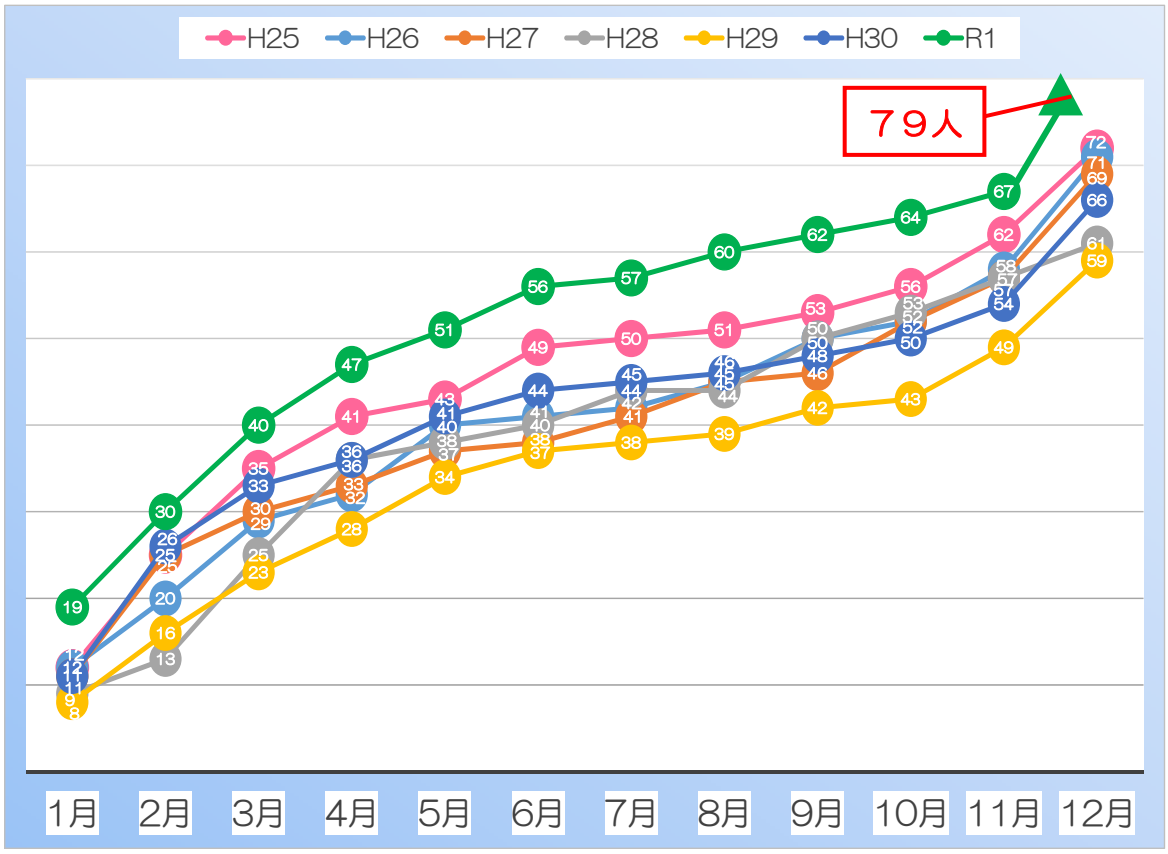
※住宅火災による死者の発生状況及び住宅用火災警報器を設置したことによる奏功事例については、別添えを参照してください。

問合せ先
東京消防庁㈹　　電話 3212-2111
防災安全課生活安全係　　内線　4195
広報課報道係　　内線 2345～2350

別添え

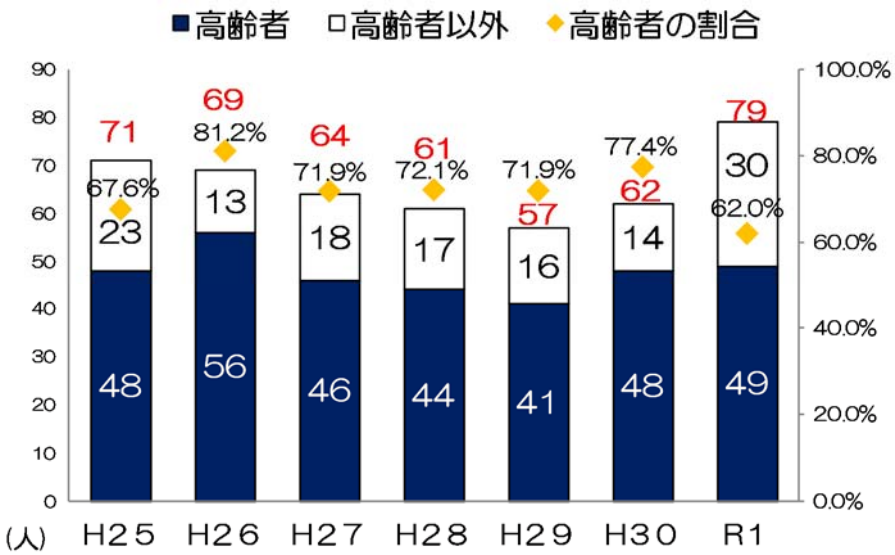
１　平成２５年以降の住宅火災による死者の推移（東京消防庁管内）

【令和元年１２月２４日７時現在】



２　平成２５年以降の住宅火災による死者の同時期の発生状況（東京消防庁管内）

【令和元年１２月２４日７時現在】

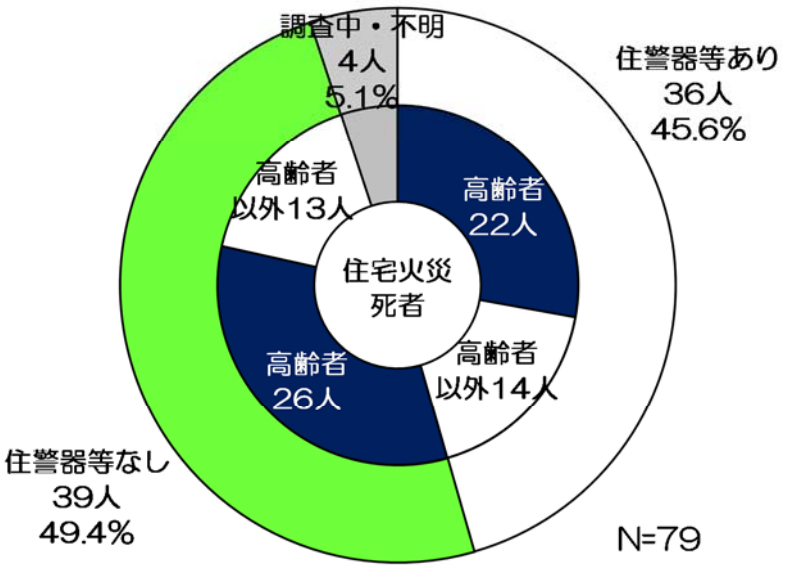


注）１　令和元年の数値は、防災安全課調べの速報値。

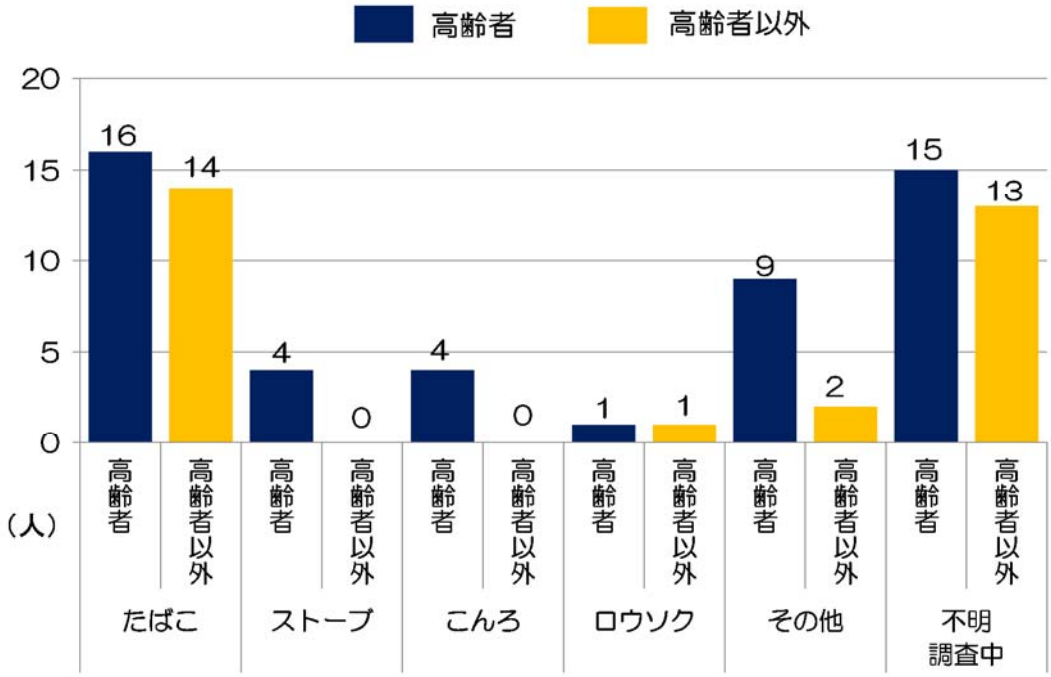
　　２　住宅火災による死者は、自損により死亡したものを除く。

３　死者が発生した住宅火災における住警器等の設置状況（東京消防庁管内）

【令和元年１２月２４日７時現在】



４　住宅火災による死者の出火原因別死者数（東京消防庁管内）【令和元年１２月２４日７時現在】



【事例１：電子レンジ】過剰加熱に早期に気づいた事例

居住者が食材を温めようと電子レンジのスイッチを入れたところ、加熱し過ぎたため、電子レンジ内の食材から煙が発生した。

居住者は、居室で食事をとっていたところ、住宅用火災警報器が作動したので音の鳴っている方を見ると、電子レンジから煙が漂っているのを発見し、１１９番通報した。

【事例２：コードの短絡】別室にいた居住者が気づいた事例

電源コードが家具に挟まれ曲がった状態で使用されていたため、コード内部で短絡し出火した。

別室にいた居住者が、住宅用火災警報器の鳴動に気付き、ルームライト付近に炎が上がっているのを発見し、家族が１１９番通報をした。

【事例３：こんろ】隣人が通報した事例

居住者が調理中であったことを忘れ、別室にいたところ、住宅用火災警報器の鳴動音が聞こえてきたため台所に戻り、鍋にかけてあった火を止めた。

また、住宅用火災警報器の鳴動音を聞いた隣人が、１１９番通報した。

【事例４：こんろ】隣人が発見・通報した事例

居住者が、鍋の火を消すのを忘れて外出してしまい、鍋が加熱され続け空焚き状態となり、発生した煙を感知した住宅用火災警報器が鳴動した。隣人は、住宅用火災警報器の鳴動音に気が付き、廊下に出て確認すると隣室の玄関の隙間から煙が出ているのを発見したため、１１９番通報した。

【事例５：電気ストーブ】連動型住宅用火災警報器の事例

居住者が２階寝室で電気ストーブのスイッチを入れたまま就寝したため、掛け布団が電気ストーブに接触して火災になった。寝室に設置してある住宅用火災警報器の鳴動音で目が覚めると、同時に１階リビングにいた家族も、リビングの連動式住宅用火災警報器が鳴動したため駆けつけることができた。浴室に掛け布団を運びシャワーで消火後、119 番通報した。